

佳作

ピアノコンチエルト

栃木県 下野市立緑小学校六年 伊澤 遼平

ぼくは幼稚園の年中からピアノを習っている。最近は、コンクールに出るため、毎日練習を欠かさない生活を送っていた。

そんなある日、ピアノの先生から、

「オーケストラと共演する、子供のピアノリストをば集めているから、オーデイションを受けてみないか。」

と声をかけられた。

オーケストラと共演することがどんなものなのか、オーデイションを受ける人たちがどんな人たちなのか、全く分からなかったけれども、とりあえず受けしてみることにした。

数日後、課題曲の楽譜を見てみると、一曲弾くの十三分近くかかり、左手も右手も、自分の苦手な速い動きばかりで、全然弾ける気になれなかった。

一生けん命練習しても、自分の思うようには全く弾けなかったの、ピアノのレッスンになると、

「ぼくにはこんな長い曲は無理。どうせオーデイションを受けても選ばれないと思う。」

と言って泣き続けた。そんな状態のぼくに、先生は、「遼平君なら絶対できるはず。何回でも見てあげるから、時間があるときにレッスンにおいで。」

と、励まし続けてくれた。何度も心が折れそうになったけれど、その度に先生や家族が支えてくれた。

先生の言葉を信じ、自分ができる限りの練習をして、オーデイションにのぞんだ。

オーデイション当日。たくさんの中学生在がエントリーしていた。学年が小さい順に弾くことになっていて、自分は一番目の演奏だった。手に汗がじわっとわいてきて、指がツルツルすべり、思うような演奏はできなかった。大きな曲を弾いた達成感よりも、ふがいない演奏しかできなかった自分のがっかりした。結果を待つ間も、落選すると覚悟していたので、早く家に帰りたい気持ちでいっぱいだった。

しかし、結果発表では、ぼくの名前が一番に呼ばれた。信じられなかった。

それから本番まで、楽団の人たちとりハーサルを

重ねながら、指揮の先生の厳しい指導を受けた。家での練習も今まで以上に時間を増やし、うまく弾けないところがあっても、手が痛くなっても、練習し続けた。

コンサート当日。学校の先生や友達、ピアノ教室の仲間や親せきなど、とてもたくさんの人たちが客席にいるのが見えた。いつものぼくだったら、緊張して思ったような演奏ができなかっただろう。でも、この時は、指揮者の先生や楽団のみなさん、練習にずっとつきあってくれた家族や先生に守られているような気持ちで満たされていたので全く緊張せず、落ち着いて演奏することができた。

コンサートまで、苦しい時間もあった。けれど、自分を支え、応援してくれる人たちがたくさんいることや、このような機会に恵まれたことを思うと、自分は本当に幸せ者だと思え、感謝の気持ちでいっぱいになった。